

タイトル	ライティング指導におけるネットワークの活用：教師による教材開発の試み
著者	上野，之江；森越，京子；尾田，智彦；吉田，翠
引用	北海学園大学学園論集，120：85-94
発行日	2004-06-25

ライティング指導におけるネットワークの活用

—— 教師による教材開発の試み ——

上	野	之	江*
森	越	京	子**
尾	田	智	彦***
吉	田		翠****

要 旨

所属を異にする複数の英語教員が、商業用無料インターネットサイトを利用して大学生のための英語ライティング教材を作成した。その作成方法を紹介する。前半は作成した教材について、後半は複数の教員による教材作成の過程について述べ、コラボレーションによる授業実践の利点を論じる。

1. はじめに

学生の多様化に対応する英語教育の必要性が論じられて久しい。学生の英語習得度の多様化、英語に対するニーズの多様化、英語学習リソースの多様化、メディアの多様化等に英語教員はどのように対応すべきであろうか。基礎的な英語の知識を必要としている学生に対し既成の教材では対応できないこともある。学生の習熟度に合わせたリーディング教材、速読教材、ライティング教材を選択することに困難を感じる教員も少なくないはずである。既成の教材に加えてインターネット上の辞書サイト、オンライン・データベース、E-mail を効果的に利用してどのような授業を展開できるであろうか。多様化した学生に対応するために自主教材の作成に取り組む教員も多い。しかし、一人で教材を開発するには膨大な時間がかかる。学内に同じ科目を担当する者がいない時、どのように教材を選び、授業を展開するのだろうか。

我々は2002年から2003年に、研究の一環として取り組んだプロジェクトを通して、この問題に一石を投じる経験をした。コンピュータとネットワークを利用したライティング指導教材を新たに開発する、それを実際に授業で使ってみるというプロジェクトの中で、インターネットを利用した教員間のコミュニケーションが威力を発揮した。プロジェクト終了後も、教員間で学ぶことが多かったと好評だった。

Collaborationという言葉が昨今よく用いられているが、同じような科目を担当する複数の教

員が大学の枠を越えて協力しあい、各自の授業を実施していくことは、ネットワークを活用すると比較的容易に可能となる。そうすることにより、短期間で教材を作成、編集、修正できる、さらに、授業終了後の結果報告、反省点は翌日授業をする予定の教員にすぐ伝えることができる。これらのことを単独で行うと満足した成果が出るまでに2年も3年もかかってしまうのではないだろうか。複数の手で、目で、実践するから期間を短縮でき、それと共に大きな成果を上げることができる。

文部科学省が策定した『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』¹⁾を実践する時、それに関わる教師間の協力、連携が必須となる。それはネットワークの活用により、迅速に効果的に実行できる。この報告では、いかにネットワークを活用するのか、文書作成ソフトとE-mailが使える者であれば誰にでも簡単にできる方法を具体的に紹介する。

2. ライティング教材の開発

2.1 教育環境

ライティング教材の開発にかかわったのは、札幌とその近郊の大学・短大で教鞭を取る英語教員である。英語専門科目に加え、一般教育としての英語科目を担当している。従って、対象学生は英語専攻・非英語専攻両方の学生である。教育環境はそれぞれ異なっているが、共通するのはCALL教室を持たないで、情報処理センターのコンピュータを利用して授業を行っている点である。コンピュータ教室としての基本的なサポートはあるが、語学教育におけるコンピュータ使用をサポートする専門職員はいない。

2.2 研究の流れ：3つの特徴

今回のライティング教材作成プロジェクトは、我々のグループが1998年から1999年に行ったE-mailコーパス分析の成果をライティング指導に生かすことから出発した。我々は海外のESL学生とE-mailでクラス交流を実践し、その後学生が書いたE-mailをコーパス化して統計的に分析を行った²⁾。その結果及びE-mailで使用されている文章観察に基づき、いくつかのライティング指導の課題を整理した。

E-mailライティングで困難を感じる学生の文章には次の3つの特徴があった。

- 1) 辞書からの直接引用
- 2) 日本語のローマ字表記をそのまま使用
- 3) 参考文献丸写し

具体的な例をあげると、

- 1) 辞書からの直接引用：

When I used to feel like isolation, I was suffering from alcoholic.

この文では、「孤独」という表現を見つけようとして、和英辞書の‘isolation’という表現を前後の文脈を考えずに選び、辞書の記述通りに使用してしまったと考えられる。‘alcoholic’についても文の前後を見ず、品詞に関する文法知識も使わないでそのまま語をあてはめてしまったと考えられる。他にもいくつかの例があるが、特徴的な例として次のようなものもある。

I anxiety economy condition and an economic policy in Europe....

2) 日本語をそのまま使用

Also I like Karaoke. I often sing GLAY.

ここでは、「カラオケ」という日本語をそのままローマ字で表現している。‘karaoke’は‘sushi’，‘kimono’等と同じようにすでに英語の中に外来語として定着しているが、同じ言語，文化を共有しない keypal にとっては、説明なしの使用は不親切である。このような場合、円滑なコミュニケーションのためにも paraphrase などを使った説明を付加する必要がある。グループ名の‘GLAY’も同様に説明がないと書き手の意図したことが伝わらない。その他の例として、対応する英語の語彙を調べる時間がなかったのか、以下のような例があった。この場合の‘fuann’（正しくは‘fuan’？）とは「不安」のことである。

Because, in this year, “fuann” is very high.

3) 参考文献丸写し

同一学生の文章に次のような2文があった。文構造，使用された文法知識，語彙の間に大きなギャップが感じられた。一部は本人が書いたのではなく，参考文献などから丸写ししたと考えられる。これは，11名の日本人英語教師，4名の英語母語話者に感想を聞いたが，前半の文は本人の書いた文ではない，という意見で皆一致した。

Sumo is Japanese national sport with a long tradition, and people from every walk of life enjoy it...

AKEBONO is one of my favorite sumo wrestlers, because he is American and a yokozuna. I wanted to be sumo wrestler.

これらの特徴を踏まえ，E-mail 及びインターネット利用のライティング練習を進める上で，学生に以下の4点を重点的に教える必要があることでグループの意見が一致した。(1) 辞書の効果的な使い方，特に電子辞書やオンライン辞書にも対応するように，もう一度辞書使用について考える時間を持つ。また，(2) 翻訳機能の落とし穴を知ること，翻訳機能をうまく使いこなす，ライティングの助けとして使いこなす技術を身につける。(3) Rephrasing（言い換えによる説明）の必要性を認識し，日本的な事柄の説明には必ず言い換えによる説明をつける文章作法を学ぶ。(4) 著作権について意識し，plagiarism（盗用）の問題について理解を深める。インターネット

を利用すると、コピー・ペーストでインターネット上の文章を自分の文章に取り込むことは簡単だが、資料を引用した場合は必ず引用先を明記することを教えるべきである。この4項目を指導目標に、我々のグループは4セクションからなる「インターネットを利用したライティング教材」を協同開発した。

インターネットとライティングを結びつけた理由は、我々の最初の試みがE-mail交流からスタートしていたことが大きい。その交流実践の中で、学生が自分の伝えたいことをうまく伝えられない例を多々目にした。このことが英語による自己表現が容易にできるようになる練習教材の開発へとつながった。協同開発した教材の最終目標は英語で容易にE-mailが書けるようになること、英語で自己表現しE-mailによるコミュニケーションがとれるようになることである。杉本・朝尾(2002, 45-49)はインターネット利用の効果について述べている中で、ネットワークでのコミュニケーションの経験がある学生とない学生の英作文を比較し、ネットワーク経験のある学生は、一貫したテーマをもって文章を書くことができ、量的にというよりは、質的に英語に変化が見られると述べている。また、これらのネットワーク経験のある学生は、授業中の単なる練習というよりも英語を意味のあることを伝える道具として試みているのではないだろうか指摘している。今回のプロジェクトも、意味のあるコミュニケーション(E-mail交流)を始めるための必要な知識を、学生に習得させる上で有益であると考えた。以下その作成過程について述べる。

3. 教材開発の手順

教材開発は次の手順で行われた。

1. (擬似) グループメーリングリストの作成
2. 教材作成の分担
3. 教材ファイルを保存するサイトの作成
4. オンライン会議
5. オフライン会議

3.1 (擬似) グループメーリングリストの作成

メールソフトの基本的な機能を使用して、メーリングリストのような働きを持たせた。つまり、(擬似)グループメーリングリストの作成とは、メール作成のときに、送信先にグループメンバー全員のアドレスを入力する、または、送信先に自分のアドレス、BCC(またはCC)にそのほか全員のアドレスを入力することによってメンバー全員がメールの内容を共有することである。以降は、各グループメンバーからのメールに対して、「全員に返信」の機能を利用して、メールを送る方法である。さらに、メールのLog(記録)を研究グループのアカウントの「受信箱」に残すことで、メールで話し合われたことを、記録しておくことを心がけた。

3.2 教材作成の分担

教材作成は，次の4つのポイントに絞って作成することにし，4名の教員でそれぞれ担当した。担当者の個性を反映して教材は作成されたが，マイクロソフトワードの形式を用いて，A4用紙2枚に収まるように統一した。また，学生に配布する教材のフォーマットやレイアウトは共通の形になるように事前に話し合われた。配布教材は，1）テーマについての説明・練習問題（学生用ハンドアウト），2）課題（ワークシート）の内容からなっており，インターネットサイトを利用した練習問題が含まれるように工夫した。また，3）教員に対する解説書（教師用説明マニュアル）も作成し，授業の進め方，教材の使い方，参考資料，参考サイトなどの情報も共有できるように準備した。学生の興味関心を引くように，新聞に掲載された最新の記事や，インターネット上の生きた言語材料を具体例や説明に利用した。

- (1) オンライン辞書の使い方
- (2) 翻訳機能の使い方
- (3) Rephrasing（言い換えによる説明）
- (4) 資料の明記

3.3 教材ファイルを保存するサイトの作成

各担当者が作成した教材を保存し，メンバーで共有するために，無料インターネットサイトのブリーフケースの機能を使用した。³⁾ プロジェクトグループのメンバーが，ログインIDとパスワードを共有することで，同じブリーフケースにアクセス可能になり，ファイルを利用することができる。各担当者は教材作成後，教材ファイルをブリーフケースにアップロードする。⁴⁾ また，その教材を使用したいときに，誰でもそのファイルをダウンロードして使用することができる。協同で作成した教材のため，「誰が作った教材か」，「どのような教材か」一目でわかるように，フォ

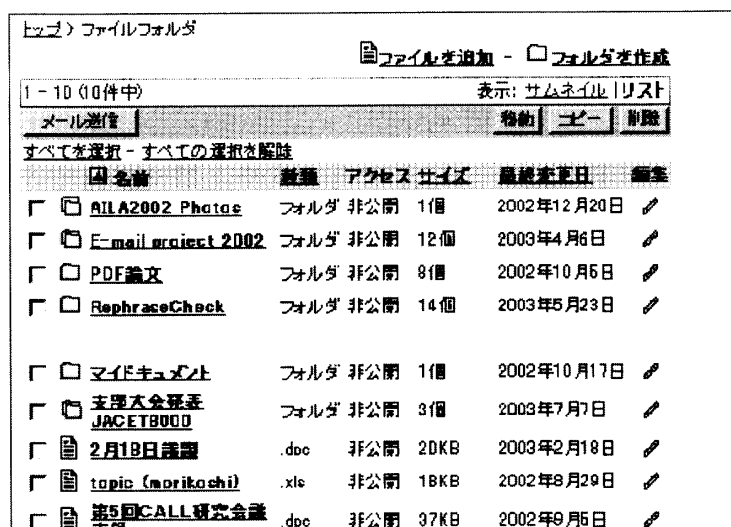


図1：ブリーフケースの中のファイルフォルダ例

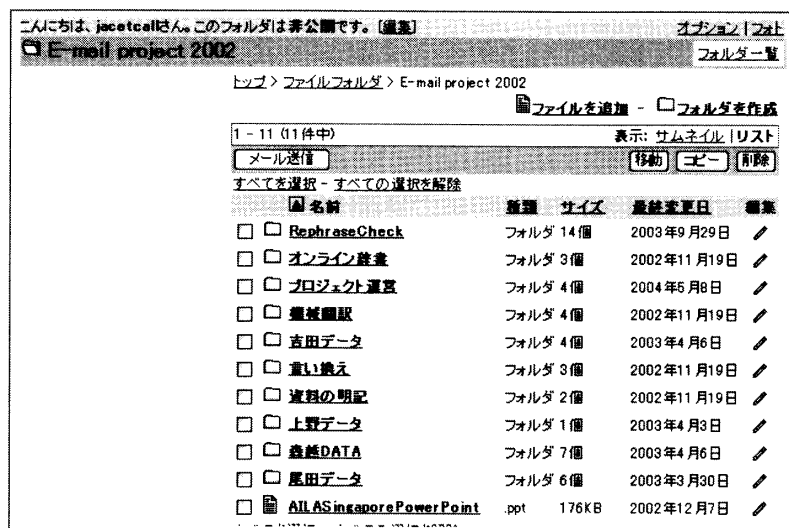


図2：ブリーフケース内のファイルフォルダ例 (E-mail project 2002)

ルダ名、ファイル名を統一した。ファイル名に関しては、半角アルファベットを用いて作成することで、ダウンロードしたときの文字化けを防ぐ必要がある。

3.4 オンライン会議

教材作成中、また、授業で教材を使用する中で、オンライン会議が持たれた。オンライン会議といっても同時に全員がコンピュータにアクセスし会議を進めることは時間的にも物理的にも難しいので、(疑似)メーリングリストを利用したメール上で、意見交換が行われた。オンライン会議では、教材作成に関して他のメンバーに意見やアイデアを求めたり、教材内容について学生に適切な例が提示できているかなど、議論することができた。授業開始後は、先に授業を行った担当者より、授業運営に関しての情報が提供され、ほかのメンバーが授業を円滑に運営できるように、アドバイスを活用することができた。

オンライン会議の例：

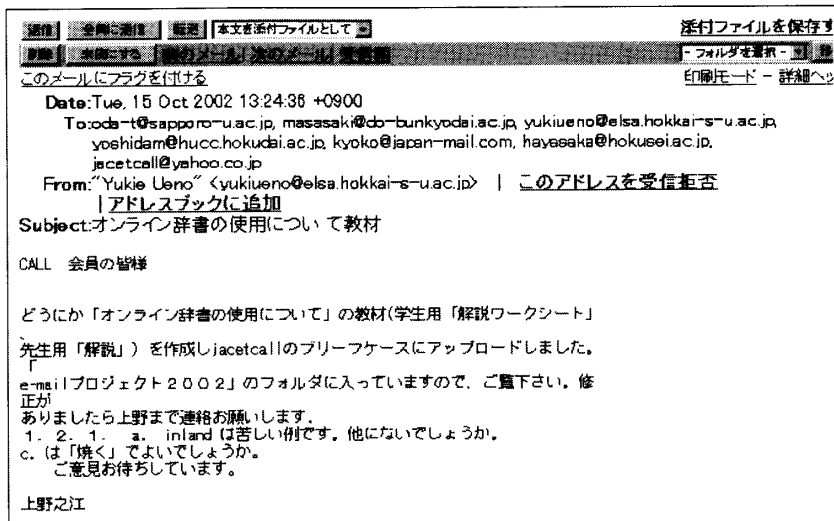


図3：オンライン会議（教材作成メール例）

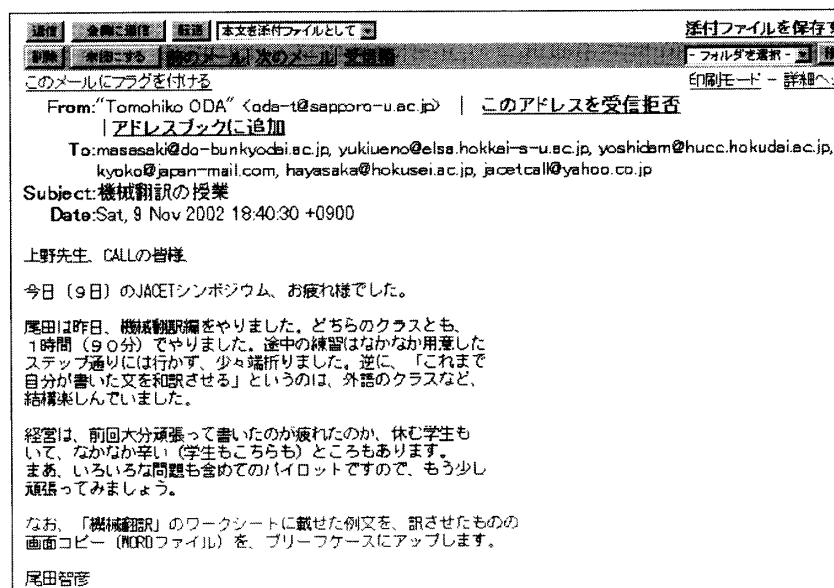


図4：オンライン会議（授業運営メール例）

3.5 オフライン会議

月に1回の割合で、メンバーが実際に顔を合わせて話し合いが進められるオフライン会議が開かれた。オフライン会議では、教材の内容やその訂正・変更についての確認、教材の利用の仕方について共通理解をもつように話し合われた。実際に教材を持ち寄って、細部まで確認ができたことで、共通理解が深まった。また、授業運営に関して、実際の問題点、各教員の工夫、学生の反応についての情報交換が行われ、その後の授業においてすぐにそれらの内容を反映でき、授業改善を行えたことは有益であった。

4. 教材協同開発の利点

プロジェクト終了後の感想として、プロジェクトメンバーが感じている利点は、以下の3点にまとめることができる。

1) インターネット上でファイルを共有したことで、いつでも、どこからでもアクセスでき、最新のデータを絶えず確認できた。

教員のコンピュータには実に様々な文書ファイル、データが入っている。教材、試験問題、会議の報告等雑多である。日常の必要からこのようになってしまうが、この状況が特定のテーマについてその都度資料を整理しておくことを困難にし、忙しさに紛れて当面のテーマ追求の脈絡を失ってしまう。これに対して、自分のコンピュータの外部に文書の保管場所を設定すると、これが特定のテーマ（本プロジェクトのテーマ）について他の教員（第3者）が見ることを前提としたものであるだけに、常に問題意識を明確にするのに大きな助けとなった。また、このような文書とデータの渦の中で整理整頓が大変な自分のシステムに依存しないので、プロジェクト用のファイルを探さなくて良く、必要なときにすぐに必要な情報が引き出せるところが便利であった。

2) 教材作成を協同で行ったことで、教材の情報量、内容が充実した。また、教員間で学び合うことができ、指導上の多くのヒントを得た。

一人でこのような教材開発に取り組んだ場合、インターネットや文献から探し出し得られる情報には限りがある。2つの目と手で探すよりも、4つ、6つ、より多くの目と手で探し出す方が情報量が多いのは当然である。複数の教員が協力することにより、教材の内容を短期間に充実させることができた。また、同じ教材を使用し授業を行うことで、それぞれの教員が持つ得意分野について学び合う機会を得ることができた。

3) 授業運営に関する情報交換ができたことで、先行クラスの反応を聞き、授業の重点・注意点を事前に確認することができた。また教材の不備をすばやく改善することができた。

それぞれが担当する学生、授業環境に応じてバラエティーのある授業運営がなされた。その実践報告から互いに新たな授業展開を学ぶことができた。

学生の反応としても、「プロジェクトの内容は興味深いものであった。」「集中できた。」「役に立つ内容である。」との意見が多く、授業の中でも新しい情報を肯定的に受け止め、積極的に参加していた。

5. まとめと今後の課題

今回、協同でプロジェクトを行い、教員間の連携の大切さや、教員相互に学ぶことの有益さが感じられた。このプロジェクトには大学内外でも国内外からでも参加でき、新しい協同研究の形を示すことができたように思う。また、このプロジェクトを発展させ、データ分析についての意見交換や共同研究執筆にも応用できるのではないだろうか。

さらに，発展させると現職教員の研修にも利用できると考えられる。研修する教員がグループで，教材を協同開発し，授業実践をするというタスクの中で多くを学び合えるピアラーニングの機会を得ることができる。

忙しい教員それぞれの力だけでは，この移り変わりの激しい情報化社会，また膨大な情報量のインターネット社会についていくのは大変であるが，協同でプロジェクトを進めることで，その波に飲まれることなく対応していくのもひとつの選択肢になるのではないだろうか。そのためには，すばやく，円滑に，充実した内容のためのオンライン会議が必要であるが，やはりそれだけでは乗り越えられない問題を解決するために，face-to-face のオフライン会議も重要であると考えられる。オフライン会議で培われた信頼関係なくして，忌憚のない議論をオンライン上で望むことはできない。

これから同じようなプロジェクトを行うにあたり注意を喚起しなければならないことがある。それは，個人情報を含むファイルの管理である。テストの点数，成績のような個人情報を含むファイルはインターネット上に置いてはならない。これからは以前にも増して情報管理のしかたにも注意が必要になってくるだろう。また，協同プロジェクトを成功させるために，各大学の状況にあわせて，柔軟に運用できるシステムを作ることである。担当者の講義内容・進め方・時間的な制約が，それぞれの大学で大きく違っているが，それぞれの学生に合わせて，また担当教員に合わせて運用できることでその利用が広がり，長続きするプロジェクトに発展するのではないだろうか。

テクノロジーの飛躍的な進歩は，Hanson-Smith (2002, 112-113) が，technology-rich and technology-poor schools の格差をさらに広げてしまっていると指摘しているように，テクノロジーに恵まれコンピュータやネットワークをよく活用している大学と，活用していない大学の格差はさらに広がっていると考えられる。しかし，コンピュータテクノロジーが十分とはいえない環境，CALL ラボがない状況でも，また，大学内の協力体制が不十分でも，地域の教員また地域を越えた教員間が協力し合い，今回のように試みることで，英語教育の可能性がさらに広がるのではないかと考えられる。³⁾

注

本稿は JACET 大学英語教育学会北海道支部 CALL 研究会が JACET 全国大会（2003 年，仙台市，東北学院大学）で発表した内容をまとめたものである。

*上野 之江（北海学園大学 教授），**森越 京子（北星学園大学短期大学部 助教授）

尾田 智彦（札幌大学 助教授），*吉田 翠（天使大学 教授）

1) 「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」文部科学省が 2003 年に策定した英語力・国語力充実プラン。詳しくは文部科学省ホームページを参照。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm

2) Ueno, Abe, Hayasaka, Oda, Sasaki, Yoshida, and Yokoyama. (2000). 参照

3) 「Yahoo Japan」→「ブリーフケース」→「ログイン」→「ID: jacetcall」→「パスワード（共有）」

- 4) アップロードするには「ファイルフォルダ」上で、「ファイルを追加」を選択し、「参照」でファイルを指定し、「ファイル名」・「説明」をそれぞれ入力する。
- 5) このような試みはもうすでに始まっている。杉本・朝尾(2002, 98-100)は胆振英語教育研究協議会のWebページをその好例として紹介している。このホームページは地域の中学・高校の英語教員が情報、意見を交換する場として活用されている。杉本・浅尾は孤立した教員をつなぐ大切なシステムとして評価している。今回の我々のプロジェクトで利用したブリーフケース、疑似メーリングリストもその基本理念はこのホームページと同じものである。我々のシステムはホームページ立ち上げにかかる手間と時間を既成の商業用サイトを利用することにより省くことができた。逆に考えると疑似メーリングリストはメンバーだけに、開かれたシステムなので、各大学の状況なども、踏み込んで議論しやすいと言えるかもしれない。

参考文献

- 杉本卓・朝尾幸次郎(2002)『インターネットを生かした英語教育』大修館書店
- 同志社大学情報に関する共同研究チーム(2004)『インターネットとパソコンを利用した英語教育：同志社大学情報に関する共同研究報告書(2002-2003)』同志社大学言語文化教育センター
- Hackshaw, Gillis-Furutaka, Ujiki, & Nagano (eds). (2002). 『ITを利用した外国語教育の改善：2002年JALT京都支部年次大会論文集』JALT 京都支部
- Hanson-Smith, Elizabeth. (2001). Computer-assisted language learning. In Carter, R. and Nunan, D. (eds). *The Cambridge Guide to Teaching English to Speakers of Other Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ueno, Y., Abe, A., Hayasaka, K., Oda, T., Sasaki, M., Yoshida, M., & Yokoyama, K. (2000). Corpus-based Analyses of E-mail by Japanese College Students. *JACET BULLETIN*, 32, 137-149.
- Ueno, Y., Oda, T., Sasaki, M., Morikoshi, K., & Yoshida, M. (2003). Three Characteristics of Japanese College Students' E-mail Writing. *JACET 北海道支部15周年記念論文集 2002年*, 1-18.
- Warschauer, M. (2001). On-line communication. In Carter, R. and Nunan, D. (eds). *The Cambridge Guide to Teaching English to Speakers of Other Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.